

星野道夫とワインの日々

濁川 孝志（スポーツウエルネス学科教員）

はじめに

星野道夫の示したスピリチュアリティを研究することは、僕の積年の課題でした。そして夢でした。実はこのテーマは、もう10年近く前から頭にあったのですが、日ごろの忙しさにかまけて、なかなか手を付けられなかったというのがそれまでの状況です。2013年度、僕は大学から1年間の研究休暇を頂けることになり、その夢を実行しようと考えました。

研究の地を選んだのは、ニュージーランド。『星野道夫の研究をするならアラスカだろう。なぜニュージーランドなんだ？』という声が聴こえてきそうです。確かにそうです。星野道夫はアラスカに在住し、そこで活躍した人です。アラスカを舞台に、その雄大な自然と動物の織りなす風景を、そして人々の営みを、写真とエッセイという2つの手段を用い、ある種の物語にまで昇華させ僕らに遺してくれた人です。だから星野道夫なら、なぜアラスカじゃないんだ？ というのは当然の疑問です。しかしよく考えてみれば、文献研究として星野道夫を追うなら日本にいた方が好都合です。今回資料として、彼の遺した写真集や著作の全集を持ち込みましたが、彼にまつわる評論など膨大な資料を全て持ち込める訳はなく、それらは必要に応じて日本から取り寄せた次第です。ではなぜニュージーランドかと言うと、僕にはもう一つ、海外のアウトドア・アクティビティの状況をつぶさに見てみたいという希望がありました。そこで選んだのがニュージーランド。ニュージーランドは、豊かな自然が色濃く残っている国です。その理由の一つは、人口密度がとても低いこと。日本の7割強の面積の国土に、たったの400万人しか住んでいません。つまり日本の30分の1の人口です。自然環境にインパクトを与えるのは、ほとんど人間の活動ですから、人が少なければ当然自然は豊かに残ります。そしてもう一つの理由は、外来種対策を始めとした政府の自然環境保全の政策が厳密になされていること。もちろんアラスカのアウトドア・アクティビティ事情にも興味はあったのですが、僕はこれまでに2度ほどアラスカを訪れており、星野道夫の足跡の一端を辿っています。更に氷点下40度にもなるアラスカの冬、そして太陽がほとんど昇らない冬の生活に不安を感じたことありま



▲ルートバーン・トラック



▲ルートバーン・トラック:氷河の痕跡

した。更に環境の厳しいアラスカでは、ツーリズムとしてのアウトドア・アクティビティはカナダやニュージーランドほど盛んではないという理由もありました。ところでこれは余談ですが、僕が日本から持ち込んだ登山靴は、入国の際検疫に引っかかり、なかなか僕のもとには届きませんでした。これは、ニュージーランドの外来種対策の厳しさを示すものです。というのもこの登山靴には僅かに日本の土が付着していたらしいのです。靴は皮の色が変わるほど徹底的に洗浄され、何と1ヶ月以上も経ってから僕のもとに届きました。出発前に丁寧に塗りこんだ保革油はきれいにこそぎ落とされ、届いたのは光沢を失った無残な代物でした。しかし、それでもニュージーランドのこの厳しさに、どこか清々しささえ感じたのを覚えています。

星野道夫の足跡

ではここで、今回の研究対象であった星野道夫の足跡を簡単にご紹介しておきましょう。星野道夫は、1952年に千葉県市川市で生まれました。彼の心には少年のころから広大な原野への憧れが芽生えており、電車で揺られている時、そして都会の雑踏の中にいる時も北海道のヒグマのことが頭をかすめるような少年でした（星野、2013）。

海外への憧れも強く、1968年16歳のときに単身アメリカに渡っています。この時星野は、約40日間、ヒッチハイクやバスを使いながらアメリカやメキシコを旅していますが、当時の日本は、今のようには誰でも簡単に外国へ行けるような時代ではありません。1ドルが360円もした時代でした。それを考えれば、若干16歳の少年がこのような旅をすることは、並外れた行動力としか言い様がありません。その後、慶應義塾大学に進学した星野は、それまでも北の自然へ関心を抱いていましたが、「アラスカ」という写真集を手に入れたことをきっかけに、北への想

いがいよいよ抑えられなくなり、1973年21歳のときにアラスカのシシュマレフ村を訪れ、そこで3ヶ月間滞在しています（星野a、2003）。

翌年の夏、親友を山の遭難で失った星野は大きなショックを受け、アイデンティティクライシスに陥り、自分の人生の方向性に関し一年ほど悩み続けます。そしてある時、「そうだ、好きなことをやっ払いこう」という答えを得、アラスカに再び渡ること、写真を撮ることを決意しました。大学卒業後2年間ほど写真家の助手を勤めた後、星野は1978年再びアラスカへ渡り、アラスカ大学の野生動物管理学部に入学しました。大学ではフィールドワークで、早い頃からアラスカの自然の深層部へ入っています。卒業することが目的ではなかった星野は、1982年にアラスカ大学を中退し、写真に専念するようになります。なかでも中学生の頃から憧れていたというクマ（グリズリー）の撮影を進め、1985年に初の写真集『グリズリーアラスカの王者』を出版し、翌1986年、同書で、当時動物写真家の登竜門と言われた平凡社主催のアニマ賞を受賞しました。

同じく1986年には初のエッセイ集『光と風』を出版しています。その後旅を重ねながら、多くのエッセイと写真集の出版をし、1990年には連載『風のような物語』が評価され、第15回木村伊兵衛写真賞を受賞しました。同じ年にアラスカのフェアバンクスに家を買ひ、アラスカへの定住を決めています。その後星野は、アラスカ先住民への関心を高め、神話を辿る旅をするようになります。そして1996年43歳の時に、取材で訪れていたロシアのカムチャツカ半島でヒグマに襲われて急死しました。その死をめぐってはさまざまな言説が飛び交いましたが、その真相は『星野道夫 永遠のまなざし』（小坂・大山、2006）に詳しく記されています。

星野道夫とスピリチュアリティ

先にも述べましたが、僕の今回の研究テーマは、星野道夫のスピリチュアリティを分析することでした。それは、僕が星野道夫の遺した作品に色濃く漂うスピリチュアリズムの匂いを嗅ぎ取ったからです。エッセイはもちろんですが、星野は写真を通じて、写真という目に見える媒体を通じて、実は目に見えないスピリチュアルな世界を表現してきたように僕には思えるのです。ではここで、僕が嗅ぎ取った星野道夫のスピリチュアリズムに関して述べたいと思います。

学童期の星野道夫が、自然やその中で暮らす野生動物に強い興味を抱いていたことは述べましたが、この頃は特にスピリチュアルな言動をみせた訳ではありません。彼が随所に示すその深いスピリチュアルな感性は、アラスカの自然の中で暮らすことで培われたものでしょう。特にエスキモーやインディアンなど先住民

との深い交流の中で、アニミスティックな彼らの生き方、つまり自然との調和の中で“生かされている”とする彼らの基本的生活姿勢が、星野道夫のスピリチュアルな思考に大きな影響を及ぼしたと考えられます。それらの代表的な事例としては、アサバスカン・インディアンチャーマンであるキャサリン・アトラスとの川旅や、その後彼女と共に参加した村の長老の「御霊送りの祝宴」であるポトラッチの体験、さらにクリンギット・インディアンのヒーラーであるボブ・サムとの旅、またクリンギット・インディアンの古老であるエスター・シェイとの交流などが挙げられます。この他にも星野は多くの先住民や特にその古老たちとの親密な交流をもち、その過程でスピリチュアルな感性を研ぎ澄ませていったのだと思います。またそれは、常に死と隣り合わせの生を営んでいるアラスカの野生生物をつぶさに観察することから身についた感性かも知れません。それと同時に、人間の力では抗うことのできないアラスカの熾烈な自然の中での生活は、自ずと人を謙虚にし、その思想や発想にも影響を及ぼしていったものとも思われます。このような過程を経て、やがて星野道夫は「神話の時代に生きた人々と同じ視線」をもってみたいと願うようになり、同時に「目に見えないものに価値を置くことができる社会」に強く惹かれるようになったのです（湯川a、2003）。実際、1994年に行われた講演「南東アラスカとザトウクジラ」の中では、星野は次のように語っています。

『今はもう宇宙に行ける時代だし、自然科学というものが非常に発達して、僕たちがいったいどういう生き物であるのか、何であるのか、少しずつ解明されてきていると思います。しかし、そういった科学の知恵が、なぜか自分たちと社会との繋がりを語ってくれない気がするんです。どんどん自分の事が世界と切り離されて、対象化されてゆくような気がする。月に行けるようになったり、自然科学が発達してきても、自分たちの精神的な豊かさが無くなってゆくような気がして仕方ありません。つまりもしかしたら、自分たちを世界の中で位置づけるために僕たちは、どこかで神話の力を必要としているのではないかと、僕は今思っています。』（星野f、2003）

そして実際に星野は、北米のインディアンやエスキモーが共通して持つワタリガラスの神話に興味を抱き、神話のルーツを求める旅を始めました。それは、湯川が指摘するように、「私たちの文明社会が、安らぎと自信をもたらしてくれる物語をすでに失っている」現状を憂慮した星野が、「あらゆる自然にたましいを吹き込み、もう一度私たちの物語を取り戻そう」と試みる旅だったのでしょう。（湯川b、2003）このように、星野道夫はアラスカの大自然の中で生きることや、

そこで暮らす人々との交流の中から自身のスピリチュアリティを育んでいったのです。

星野道夫の著作は、写真集、エッセイを合わせて20点以上にのぼります。決して多いとは言えませんが、写真家・作家としての活動期間が15年程度であったことや、作品を産み出すためのベースがアラスカの野外フィールドであり、キャンプに多大な時間を費やしたことを考えれば、それは旺盛な執筆活動の足跡として見るすることができます。

比較詩学を専門とする菅啓次郎は、星野道夫の作品を評して「この人は、一種の死後の視線、墓の彼方からの視線を持って人間の世界を見ることができた」としました。それは、星野がアメリカ・インディアンという「七世代の掟」、つまり七世代後の時代を考慮して現代の行動規範を決定したような、悠久の時間感覚を身に着けていたという評価です。そして、星野の文章と写真は、「神話」を媒介として結合していると捉えました。それは、神話の思考を作り上げている特殊な空間で写真を撮り、神話の語られているのと同じ空間で現代の散文を書くという星野道夫の手法を評しての考察でありました（菅、2003）。

宗教人類学を専門とする中沢新一は、星野道夫の写真を評して、「こちら側のハンターとして動物を見ていない。普通の動物写真家みたいに、動物をショットして、そのまま帰って来たりしない。ちゃんと自分の行為を償うために、動物たちとの関係を幻想の中でも保ち続けようとして、神話の世界に送り返す「イヨマンテ」までやろうとしていた。」としています（中沢、2003）。

さらにエッセイストである湯川豊は、星野道夫がくりひろげた物語を、一口で言えば、彼が惹かれたのは「目に見えないものに価値を置くことができる世界」であり、その世界を体現している。つまり、今なお神話の世界を心身のうちに持っている人々と同じ視線でアラスカの大地を見ようとしたのだった、と評しています（湯川a、2003）。

先にも述べましたが、星野道夫は亡くなるまでの最後の数年間、多くの北米先住民族が共通して持つワタリガラスにまつわる神話のルーツを求めて旅を続けました。それは現代社会の核となるものを探す旅、つまり、神話の中に現代が必要とする何かを見出そうとする旅でした（星野、2003a）。作家の柳田邦男は、星野道夫のこの旅を「先住民の古老の言葉をヴィヴィッドにとらえ、現代の意味を問い詰める仕事」と評しています（柳田、2003）。

これら多くの評論に示されるように、星野道夫の仕事は色濃くスピリチュアリティに彩られたものでした。

星野道夫（1996）は、「ナヌークの贈りもの」という美しい絵本の中に、次のような一文を残しています。

「われわれは、みな、大地の一部。おまえがいのちのために祈ったとき、おまえはナヌークになり、ナヌークは人間になる。いつの日か、わたしたちは、氷の世界で出会うだろう。そのとき、おまえがいのちを落としても、わたしがいのちを落としても、どちらでもよいのだ。」

ナヌークというのは、イヌイットの言葉で白熊を意味します。この神話の世界を映したような絵本が出版された半年後、星野はロシアのカムチャッカでヒグマに襲われ命を落とします。まるで、自分の死までも予言するような物語でした。

今も続く星野道夫展

星野道夫が他界して、20年近い歳月が流れようとしています。しかし現在でも毎年のように彼の写真展や、関連する講演会などのイベントが全国で行われています。因みに比較的最近の事例を挙げれば、1998年から2000年の間に朝日新聞社主催の『星野道夫の世界展』が開催され述べ43万6535人が、200年から2005年にかけても同じく朝日新聞社主催の『星野道夫の宇宙展』が開催され述べ46万6157人が、そして2006年から2008年にかけてNHK主催の『星のような物語展』が開催され述べ32万6784人が会場を訪れています（星野道夫事務所調べ）。その他にも地域の図書館や市民団体による数多くの写真展やイベントが毎年開催され、2013年だけでも5回にわたる展覧会が開かれています。また星野道夫の文章は、教材として多くの教科書に採用され日本の学童に親しまれてきました。そして、いまだに彼の業績を編集した新たな著作『悠久の時を旅する：クレビス：2013年』（星野、2013）が出版され続けています。このような状況は、正に時代が星野道夫的な何かを求めているからでしょうし、時代がスピリチュアルな価値観を求めていることを示唆するものではないでしょうか。

研究とワインの日々

1) スピリチュアリティの意味、そして星野道夫研究

ところで、「スピリチュアリティ」ってなんでしょう？ これまでに宗教や医療、健康科学や心理学を中心に様々な分野で研究されてきたスピリチュアリティですが、実は、この問いに対する標準化された明確な答えはありません。しかし多くの研究者の共通見解として得られているのは、

「スピリチュアリティとは、従来から使われてきた宗教という言葉から、その組織や制度としての側面を排したもの」であり、（安藤、2007）、

「スピリチュアリティは、宗教のもつ拘束的、排他的、教条的な部分を取り除

いた包摂的なイメージを持つ言葉であり、かつ宗教の本質、あるいは宗教において普遍的なものを担っているもの」(葛西、2003)、という解釈です。

つまりスピリチュアリティとは、ごく大雑把に言えば、多くの宗教が説明している宇宙の成り立ち、超越的存在(神)との繋がり、生きる上での規範などを中心とした価値観のエッセンスで、そこから個々の宗教の持つ教条的な部分、排他的な部分を取り除いたものと言えるでしょう。

ところで、このスピリチュアリティを研究対象とする時には、その定義づけや標準化という試みは必然です。医療、看護、心理学などの分野でスピリチュアリティに関する疫学的検討を試みる場合は、それが標準化されていることが前提となるからです。しかし一方で、「スピリチュアリティは個人の多彩で多様な経験と関わり、文化の深層につながる感覚で、一つの言葉では表現しきれない深淵」であるとする立場もあり(辻内、2005)、今後スピリチュアリティは医療や心理分野だけでなく、より多様な立場から分析され、場面に応じてスピリチュアリティの解釈を使い分ける必要があるだろうとの指摘もあります(辻内、2005)。そこで僕は、多様性を持つスピリチュアリティに関して、文学作品を通しての解釈を試みた訳です。そして選んだのが、星野道夫。アラスカの自然の中で多くの野生動物と関わりながら紡ぎだされた彼の写真や文章には、スピリチュアリズムの香りが色濃く漂っていたからです。

研究方法の概要は、まず星野道夫の全著作(星野道夫全集全5巻:新潮社)(星野、2013a-f)から、その表現がスピリチュアルな部分、あるいは文脈からスピリチュアリティに色濃く関わると思われる部分を全て抽出します。そして、ここで得られた文章をKJ法により分析し、星野が示したスピリチュアリティの意味や概念構造を解析するというものでした。こう書くと簡単そうですが、全集を丹念に読み通しスピリチュアルな文章を抜き出した上で、それを切片化し、カテゴリーにまで構築するには、とてつもない時間を要しました。逆に言えば、研究休暇を頂いて、この作業に専念した日々は僕にとってとても幸せな時間でした。

結果として、【万物の繋がり】、【自然との調和】、【古い知恵の継承】、【輪廻】、【年長者への敬意】、【目に見えない存在の価値】の6項目が、星野道夫の示したスピリチュアリティの構成因子として生成されました(濁川、2014印刷中)。「星野道夫のスピリチュアリティ」と題するこの論文は、日本トランスパーソナル心理学/精神医学会誌に原著として受理されました。それは積年の課題が一つ片付いた瞬間でもありました。先にも記しましたが星野道夫が現在でも多くの日本人の支持を得ていることを考えると、これらの内容は日本人が好むスピリチュアリティの一形態かも知れません。ここで得られた諸因子を総合して星野道夫のスピリチュアリティ観をまとめると、以下のような人間像が浮かび上がります。すなわ

ち、自然との調和を重んじ、年長者や古い知恵に生きるべき方向性を仰ぎながら、物質を超えた目に見えない存在にも価値を見出し、多様性を認めつつも全ての存在が繋がっているというトランスパーソナル思想をもち、輪廻という悠久の旅を続ける人間。経済活動が優先され、物質的な価値観が偏重されがちな現代社会において、人々は地球環境の危機的な状況や、その他様々な格差や歪みを否応なく感じています。そのような社会にあって、人々は無意識のうちに、星野道夫が示したようなスピリチュアリティ観に未来の希望を託しているのではないのでしょうか。

2) 星野道夫とワインの日々

ところで僕のニュージーランドでの生活はというと、それは今振り返っても夢のような日々でした。基本的に時間的拘束はほとんど無いのですが午前9時ころから勉強を始め、疲れると1時間ほど筋トレやジョギングをして、残りの時間はまた星野道夫に戻り、午後の5時ころまで研究を続けます。もちろん午後眠くなれば、近くの白樺の木陰で昼寝をすることもあります。そんな時は、昼間ですが寝酒のワインも忘れません。そして、5時を合図にビールが始まります。ビールはやがてワインになり、最後にウイスキーかブランデーで終わります。その間、星野道夫の写真集をめくりながら夕暮れを眺めたり、季節によっては満天の星空に南十字星やカノープスを探し、概ね9時頃に酔っぱらって崩れ落ちるように寝てしまいます。本当に毎日飽きもせず、そんな日々の繰り返しでした。

約10か月ほどの奮闘で星野道夫研究に一応の目途をつけ、最後の2か月はアウトドア・アクティビティに明け暮れました。こう書くと、まるで遊んでいたように思えますが、決してただ遊んでいた訳ではありませんよ。ニュージーランドのアウトドア事情を知ること、今回のサバティカルの大切なテーマだったのです。その時ベースにしたのは、クイーンズタウンという南島の中でもかなり南方に位置する小さな街です。ここは、森と湖に囲まれたとても美しい土地でした。この街はあまりにも美しく、ヴィクトリア女王にふさわしいという理由で「女王の街」、つまり「クイーンズタウン」と言う名前が付いたと言われています。またバンジージャンプ発祥の地としても有名です。そして色々なアウトドア・アクティビティを体験するには、立地条件がとても良い所でした。

僕がニュージーランドで体験したアウトドア・アクティビティをざっと挙げると、次のような感じです。登山、森林トレッキング、ホースライディング、ヘリスキー、ラフティング、シーカヤック、スカイダイビング、パラグライディング、キャンプでの星空観察など等…どれも素敵な体験でした。中でも、青い残雪の山々を眺望しながら歩いた「ルートバーン・トラック」と呼ばれるトレッキング

ルートと、エイブル・タズマン国立公園の海をシーカヤックで巡った旅は、野生動物にも出会えて最高の日々でした。

日本との違いは、何といってもフィールドに人が少ないこと。こんな素晴らしい場所に何で誰もいないんだろうと感じ、感動を誰かとシェアしたい気持ちにかられたことも度々です。星空も素敵でした。晴れた日の夕方には、マットと寝袋とヘッドランプとウイスキーだけ持って、近くの草原に行って朝まで星を観ながら過ごしたことが何回もありました。誰も来ません。流星をいくつ数えたことか。願いを3回繰り返すのは、いつも忘れていました。そして朝方、寝袋は大抵夜露でぐっしょり濡れていました。今思い出しても、宝石のような素敵な時間でした。

ニュージーランドの自然の中にと、地球環境が劣悪な状況を迎えていることなど嘘のようです。しかし地球規模での現実はそのほど甘いものではなく、かなり切羽詰った状況があります。例えば森林伐採に関する話しは驚きで、なんと地球上の森林面積は僅か1秒間で、テニスコートにして16面分の広さが消失しているという推定もあります。1日にしたらどの位になるのか、1年にしたらどの位になるのか。ちょっと想像がつかないような広さですね。でもこれが現実です。また、先の震災による福島原発を巡る状況はかなり特殊なもののですが、しかしよく考えてみると、人間のエゴという意味では、原発を巡るこの惨状は今の環境問題の象徴なのかも知れません。

星野道夫は、この混迷した世の中、道を見失った世の中に今必要なのは、人々が共通に理解できる神話だと記しています。そして、その神話を求める旅の途中で帰らぬ人となりました。星野道夫の求めた神話が果たしてどのような物語だったのか。それは、今となっては知り得ません。しかし仮にその神話を現代人が獲得すれば、彼の示したスピリチュアリティを体現する世の中、すなわち【万物の繋がり】、【自然との調和】、【古い知恵の継承】、【輪廻】、【年長者への敬意】、【目に見えない存在の価値】などを重んずる社会が生まれたのでしょうか。

この星野道夫を追って映画監督の龍村仁は、『地球交響曲第3番：星野道夫に捧ぐ』という素敵な映画を作っています。その龍村仁が、一連の映画、地球交響曲シリーズを通じて現代人に投げかけるメッセージがあります。僕は、そのメッセージこそが、星野道夫が追っていた神話に通じるものではないかと、密かに考えています。以下にその言葉を引用してみます。

龍村仁の言葉より

『かつて人が、花や樹や鳥たちと本当に話ができた時代がありました。その頃、人は自分たちの命が、宇宙の大きな命の一部であることを誰もが知っていました。



▲エイブル・タズマン国立公園：シーカヤックの旅

太陽を敬い、月を崇め、風に問ね（たずね）、火に祈り、水に癒され、土と共に笑うことが本当に生き生きとできたのです。ところが最近の科学技術のめまぐるしい進歩とともに、人はいつの間にか、『自分が地球の主人であり、自然は自分たちのために利用するもの』と考えるようになってきました。その頃から人は、花や樹や鳥たちと話す言葉を急速に忘れ始めたのです。人はこのまま自然と語り合う言葉を、永久に忘れてしまうのでしょうか。それとも科学の進歩と調和しながら、もう一度、その言葉を思い出すことができるのでしょうか。』（龍村, 2014）

世界中で紛争が絶えない現在、そして経済活動や地域開発が優先され自然環境が劣悪な状況を見せている現在、我々人類に問われているのは、正にこのメッセージではないでしょうか。これまで人間は、科学技術の発展を強く志向してきました。もちろん、科学技術の進歩はとても大切です。そのお蔭で、我々の暮らしは格段に快適になり、多くの人がその恩恵に浴しています。しかしテクノロジーだけが暴走したのでは、結局人間は幸せになれないような気がします。人間のみならず、地球上の生命の幸福には結び付かないような気がします。原発などは、その象徴ではないでしょうか。このような現代社会に今求められているのは、僕は「調和」だと考えます。「人と自然との調和」、「テクノロジーと自然環境との調和」「人と人との調和」、「国同士の調和」。そして僕らが再び龍村仁の言う「自然と語り合う言葉」を思い出したとき、自ずと調和は育まれ、初めて明るい未来が拓けるような気がします。星野道夫が追い求めていた世界も、きっとその辺に在ったのではないのでしょうか。ニュージーランドの山や湖を眺めながら、そんなことを考えていました。それは本当に素敵な時間でした。

この拙いエッセイを、最後までお読みいただいた皆さんに感謝いたします。有難うございました。

【引用文献】

- 安藤治 (2007) . 現代のスピリチュアリティーその定義をめぐってー 安藤治、湯浅泰雄 (編) . 『スピリチュアリティの心理学』. セセらぎ出版 (大阪), 11-33.
- 星野道夫 (1996) 『ナヌークの贈りもの』 小学館 (東京)
- 星野道夫 a (2003) 『星野道夫著作集1』. 新潮社 (東京)
- 星野道夫 b (2003) 『星野道夫著作集2』. 新潮社 (東京)
- 星野道夫 c (2003) 『星野道夫著作集3』. 新潮社 (東京)
- 星野道夫 d (2003) 『星野道夫著作集4』. 新潮社 (東京)
- 星野道夫 e (2003) 『星野道夫著作集5』. 新潮社 (東京)
- 星野道夫 f (2003) 『魔法の言葉ー星野道夫講演集』. スイッチ・パブリッシング (東京)
- 星野道夫 (2013) 『悠久の時を旅する』. クレヴィス (東京)
- 葛西賢太 (2003) 「スピリチュアリティ」を使う人々. 湯浅泰雄 (監修) 『スピリチュアリティの現在』. 人文書院 (東京), 123-159.
- 小坂洋右・大山卓悠 (2006) 『星野道夫 永遠のまなざし』. 山と溪谷社 (東京)
- 中沢新一 (2003) 動物によるテクノロジーのほうへ. ユリイカ詩と批評, 12, 42-59.
- 濁川孝志 (2014) 星野道夫のスピリチュアリティー文学作品から日本人の志向するスピリチュアリティの一形態と、その多様性を考える試みー日本トランスパーソナル心理学／精神医学 14 (1) 印刷中
- 管啓次郎 (2003) 動物によるテクノロジーのほうへ. ユリイカ詩と批評, 12, 42-59.
- 辻内琢也 (2005) スピリチュアリティの残照. 湯浅泰雄、春木豊、田中朱美 (編) 『科学とスピリチュアリティの時代』. ビイグ・ネットプレス (東京), 48-56.
- 龍村 仁 (2014) : 『地球交響曲とは』 <http://gaiasymphony.com/gaiasymphony/guide> (2014年8月15日)
- 柳田邦男 (2003) 複眼の思索者. ユリイカ詩と批評, 12, 60-61.
- 湯川 豊 a (2003) 一粒の雨を見よ. ユリイカ詩と批評, 12, 66-81.
- 湯川 豊 b (2003) 失われた物語を求めて. 星野道夫『星野道夫集4巻』. 新潮社 (東京), 327-343.